

■ 解答・解説

問1 イ (たいへん・非常に)。「いと」は程度のはなはだしさを表す副詞で、「とても・非常に」の意味。ここは「雪がとても高く(深く)降り積もっている」となる。なお打消の語をとまなう「いと～ず」は「たいして～ない」となるが、ここは打消がないので「非常に」でよい。

問2 いつもと違って／ふだんと違って。雪が深いので、いつもは昼間に下ろさない御格子(しとみど)を、めずらしく下ろしている状況を表す。

問3 「なら」は断定の助動詞「なり」の未然形。「ず」は打消の助動詞「ず」の連用形。「例」は「いつものこと・通例」の意の名詞で、「例ならず」で「いつもの通りではない＝いつもと違って」となる。

問4 ウ (御格子をお下ろしする)。「まゐる」は本来「参上する・差し上げる」という謙譲語だが、ここは「御格子まゐる」で「御格子をお下ろしする(お上げする)」という特別な使い方。雪が深いので、いつもは下ろさない昼間に御格子を下ろしている、という前後の文脈(「例ならず」)に合う。

問5 種類…丁寧語(または謙譲語)の「さぶらふ(候ふ)。「あつまりさぶらふ」で「(女房たちが定子のおそばに)集まってお仕えしている・控えている」の意。中宮定子への敬意を表す(作者から定子へ)。*「さぶらふ」は貴人のそばに「お控えする」謙譲の用法で、ここでは定子への敬意とおさえておけばよい。

問6 「どうであろうか(どんなふうだろうか)。「いか」は状態をたずねる語、「なら」は断定の助動詞「なり」の未然形、「む」は推量(または婉曲)の助動詞。中宮定子が「香炉峰の雪は今ごろどうなっているでしょうね」と問いかけている。

問7 推量の助動詞(「～だろう」)。ここは定子が雪の様子を想像してたずねる場面なので推量でとるのが自然。なお、やわらかく言いさす婉曲(「～のような」と見る立場もある)。

問8

問9

問10 「させ」は使役の助動詞「さす」の連用形で、「(人に)～させる」の意。清少納言が(女房や女童に命じて)御格子を上げさせたことを表す。一方、問9の「笑はせたまふ」の「せ」は尊敬(二重敬語の一部)で、定子への敬意を表すものであり、意味が異なる。同じ「す・さす」でも、文脈によって使役か尊敬かを見分けることが大切。

問11 イ (～さえ・～までも)。「さへ」は添加(そのうえに～までも)を表す副助詞。「歌などにさへうたへど」で「(その故事は)歌などにまで詠まれているのに」の意。*現代語の「さえ」と意味がずれる点に注意(古語「さへ」=添加、限定の「だけ」ではない)。

問12 「よら／ざり／つれ」。「よら」は動詞「よる(寄る)」の未然形(ここでは「思ひよる=思いつく」の一部)、「ざり」は打消の助動詞「ず」の連用形、「つれ」は完了(確述)の助動詞「つ」の已然形。

問13 名称…係り結び(の法則)。直前の係助詞「こそ」を受けて、文末(結び)が已然形になっている(「つれ」は完了「つ」の已然形)。

問14 「(御簾を上げて漢詩を表すなどとは) 思いつきもしなかった」。女房たちが、自分にはそのような機転は思いつけなかった、と感心して言う言葉。

問15 イ ((女房として) そうあるべき人のようだ)。「さべき」は「さるべき」が縮まった形で「そうあって当然だ・ふさわしい」、「なめり」は「なるめり」が縮まった形で「～であるようだ」。女房たちが「やはりこの(定子様の) 御所にお仕えする女房は、こうでなくては (=これほど機転がきく人でなくては) いけないようだ」と清少納言をほめている場面。

問16 「さるべきなるめり」→「さべきなめり」。語中の「る」が発音されなくなる変化が起きている。「さるべき」→「さべき」、「なるめり」→「なめり」のように、「る」が落ちて表記の上でも省かれている(「なるめり」→「なんめり」と撥音便になり、その撥音「ん」が無表記になって「なめり」となった形)。

問17 ウ (才知に感心しほめたたえる気持ち)。女房たちは「やはりこの宮(定子様)にお仕えする女房は、これくらい機転がきく人でなくては」と、清少納言の当意即妙のふるまいをほめている。

問18

問19 イ (をかし)。『枕草子』は明るく知的に物事の趣を捉える「をかし」の文学と呼ばれる。これに対し、『源氏物語』はしみじみとした情趣「あはれ(もののあはれ)」の文学とされる。

問20 作者…紫式部(むらさきしきぶ)。仕えた中宮…(中宮)彰子(しょうし)。*清少納言が仕えた定子と、紫式部が仕えた彰子を取り違えないように注意。『枕草子』=清少納言=定子=をかし、『源氏物語』=紫式部=彰子=あはれ、とセットで覚えるとよい。
